

敵と味方Ⅰ

1

萌黄もえぎは自分のあげた声に驚いて目を覚ました。

身体がじつとりと汗ばんでいる。タオルケットに爪を立てたままの指からも、まだ力が抜けていない。

誰かに追いかけられていた。真っ暗な一本道をずっと。そんな夢を見ていたようだ。幸いにも、目覚めと共に悪夢はどこかへ退散したようだ。

「起きた？」

むんが萌黄の顔をのぞき込んできた。

萌黄は自分の部屋にいた。左右反対の部屋。これだけは夢ではなく現実だった。

帰る電車に乗り込んだところまでは思っているが、そのまま寝込んでしまったらしい。気を失ったのかもしれない。

「ごめん。また運んでくれたんやね」——しかもずっと見ていてくれて。

「あはは、少しは元気になったようね」

むんとは同じ年齢としだ。なのに彼女の前に出るといつも

妹役を演じてしまう。対等に話しているつもりでも、つい甘えてしまう自分がいる。実際むんに助けられたことは数限りなくあるのだが。

「写真、見てたんやね」

「ああ……うん」

むんが左手に持っていた写真立てを、所在なげに揺らした。勉強机に飾ってあったもので、昨年の夏、萌黄とむんが、むんの弟にせがまれて、初めて行ったUSJで記念撮影したものだ。

「昇ちゃん、はしゃいでたよね、あの日」

むんがうなずき返す。彼女の弟である昇太郎のことはやはり幼い頃から知っているので、萌黄にとっても本当の弟のような気がしていた。名前も姉がむん（ムーン）で弟が昇太郎だから「月が昇る」という流れなんだと、彼女らの父・太一が話してくれたことがある。

「弟のこと、覚えててくれてありがとう」

ぼつりとこぼれたむんの言葉に、北海道が消えたとかされたときの彼女の姿を思い出さずにはいられなかった。

むんはひたすら怒っていた。何か見えない相手に対し、憤り続けていた。下北半島の突端に集まり、何もなくなつた北の海へ向かつて嘆き悲しむ人たちのなかで、そんなむんの姿は異彩を放っていたという。背が高くてス

タイルのいい美人ということもあり、各局のニュースはこぞつてむんの言動を取り上げた。むんは自分の見栄えがいいことなどに頓着しない性格だし、カメラに語った言葉も理路整然としていて的を射たことが多く、視聴者から多くの支持を得られたらしい。

むんをタレントとしてデビューさせようと目論んだ芸能プロダクションもあったと聞く。彼女はそんなものばてんで歯牙にもかけず、耳すら貸さなかった。その代わり、今日行くつもりだった遺族の会のような場所には、乞われると無理にでも時間を作って出かけていった。

萌黄はむんが泣くところを一度も見たことがない。北海道のことは彼女に計り知れないショックを与えたはずだ。これまではむんに庇^{かば}ってもらうばかりだったけど、今こそむんを庇つてあげよう、力づけてあげよう、そう思っていたのに、むんはくじけるといった素振りを人前ではいつさい見せなかった。

もちろんむんが血も涙もない人間だというのはない。人一倍感受性豊かであることは、誰よりも萌黄が一番よく知っている。だからこそむんは魅力的なのだ。きっと彼女の見える怒りは、悲しみの裏返しなのだろう。

カチャリ。玄関扉の開く音がした。母のご帰宅だ。

（裏返った）時計を見るともう午後五時。かなり眠って

いたらしい。壁向この廊下から声がする。

「あらあら靴がある。萌黄ー早かったのね、むんもいるの？」

部屋の扉が開き、母親の顔がのぞき込んだ。

「あらあ、また寝てるの？ まさか今日は学校へ行かなかったんじゃないでしょうね？」

「行つたよ。帰ってきたら疲れが出たんで横になつてるだけ」

「ホンツトにこの子は弱虫ねー。むんちゃん、こんばんは。またお世話かけちゃったみたいでごめんね。シュークリーム買ってきたんだけど、いっしょに食べない？」

「はい、いただきます」

むんはにこやかに返事した。萌黄は気恥ずかしくなつてタオルケットの下に潜り込んだ。

萌黄は母親がどうも苦手だ。いつも思いつくまま気分のままにしゃべり散らす。その内容がまた短絡的で無遠慮で無分別でぶしつけときているから、できれば人前にさらしたくないとまで思っている。

そんな母に耐えられなくなったのか、父が家を出ていったのが今から三年前。お父さん子だった自分の神経は引き裂かれ、母の陽気な特質は歯止めを失った。

父は置き土産にこのマンションを置いていった。母は生活費を稼ぎにパートに出、自分は父から振り込まれる

養育費で大学に進むことができた。

「二人とも、ニュース聞いたあ？」

キッチンでお茶の準備を始めた母が、大きな声で話しかけてきた。お隣さんにまで聞こえそうだ。

「何のニュースですかあ？」とむんが問い返す。

「あら、まだ知らないのね。わたしびっくりしちゃったわよ。まさかーって職場でも誰も本当だとは思わなかったし、番組のおフザケ企画に決まってるわよーなんて口では言いながら、もし事実だったら明日から――」

「だから何があったの？」

イラついた萌黄が、布団の中から先を促した。

「何がって、ハモリさんよ」

「ハモリ？ あの『ハモっていいとも』の？」

「ついさつき自殺したんですって」

「じ……」

萌黄はむんと顔を見合わせた。

2

ハモリさんが亡くなった――。

萌黄はまじろぎもせず虚空を見つめた。

どこか遠くでサイレンの音がする。また救急車が走っているのだ。その音がイヤになるくらい萌黄の心をかき

乱し、不安を煽った。

萌黄は“お笑い”が大好きだ。ごひいきの芸人は山ほどいて、そんな彼らのテレビ＆ラジオ出演をチェックするのが彼女の日課になっていた。

特に高校生時代、学校が休みがちになると、昼間から家でお笑い系の番組を観る機会が増えた。中でもお気に入りだったのが『ハモっていいとも』だ。ハモリの美声とハズし気味のギャグにはずいぶんと現実逃避させてもらった。

そんなハモリさんが???

「テレビのニュースでやってるかもよおー」

娘の気も知らず、母の脳天気な声が廊下に反響する。

むんが扉のところで萌黄を振り向いた。

「どうする？」

「ん……観る」

答えると萌黄はベッドを這い出した。その時になって自分がちゃんと寝間着に着替えていることに気がついた。むんが着替えさせてくれたのだ。ああやっぱりふがいないなあ、わたしって。

リビングはコーヒーマーカークから溢れるかぐわしい匂いで満ちていた。萌黄はリモコンを取り上げるとスイッチを押そうとした。しかしオンオフボタンがいつもと反対側に付いていることに気づき、いまましい、と憤慨

しながら指を滑らせてボタンを押し直した。テレビは鈍い音をたて、液晶画面が明るくなった。

いきなりレポーターらしい女性の声が流れてきた。

「――再びアルタ前です。訃報を聞いて駆けつけたファンの方々で、ここはご覧のように溢れかえっています。新宿東口付近は、後から後から押し寄せる人波で完全に埋め尽くされています。誰もがハモリさんの突然の死を悼んでいます。」

あ、お待ちください！ 今、アルタ壁面の大型ビジョンにハモリさんの姿が映りました。在りし日のハモリさんです。聞こえますでしょうか、ファンのみなさんのハモリコールです。悲しいコールです――」

画面がスタジオに切り替わった。沈痛な面もちの男性キャスターが話し始める。

「以上、現場の新宿からでした。――何度もお伝えしていますように、今日午後三時過ぎ、タレントのハモリこと森葉一芳さんが、楽屋で首を吊っているのが発見されました。すでにハモリさんは死亡しており、自殺と断定されました。」

ハモリさんは、今日昼放送された番組『ハモっていいとも』の本番開始直後、カメラの前で意味不明の言葉を口走り、共演者に暴行をはたらくなどの姿が放送されました。番組は即時中断され、ハモリさんはマネージャー

を通じて本番中の失態を陳謝し、《疲れがたまっていたせいでご迷惑をおかけしました。私のしゃべった内容は全く意味がありません》とのコメントを発表しました。その後、楽屋で横になりたいという本人の希望で、関係者はしばらく様子をみようということになったのですが、約二時間後、ハモリさんは変わり果てた姿で発見されることになりました」

画面には、カメラに噛みつかんばかりに身を乗り出したハモリの写真が映し出された。さすがに動く映像は差し障りがあったのだろう。写真は次々と切り替わっていく。混乱していくスタジオの有り様が手に取るように判った。

再びキャスターが登場した。隣には有名な芸能レポーターがいる。キャスターが口を開いた。

「梨之元さん、ハモリさんは最後の出演で意味不明の話をされたのですが、どのように思われますか？」

梨之元は自分の太い眉を指で掻きながら、

「『今朝起きると、右と左が逆になつていた』と言った彼の真意が何なのか、私にも判りません。溜まりに溜まったストレスがあらぬ妄想を産んだとしか言いようがない……。責任感の強い彼でしたから自分のとった行動を激しく反省し、あのような悲劇的な形ではじめをつけたんじゃないかと、もはや推測するしかありませんね」

萌黄は両手で口をふさいで、あげそうになった声を必死で押しとどめた。

ハモリさんも左右が逆だと？

しかも今朝起きてから？

わたしと全く同じやないの！

彼女は画面に映るハモリをじっと見つめていた。彼のマイクを握る右の手を。

3

テレビは、今夜は予定を変更して追悼番組をお送りしますと言い、さまざまな芸能人や著名人から届いたコメントを紹介し始めた。

「あらあら冗談やなかったんやねえ。あんな人でもストレスとか悩みとか抱えてはるんかしら。お金も儲けてはるし、何不自由ない暮らししてると思ってたんやけどねえ。そいでも生放送中に暴れたりしたらあかんわ、亡くなったんは気の毒やけど、天狗になつてはったんと違う？」
母・景子^{けいこ}はしたり顔で論評した。すると萌黄はソファの背をバンと叩くと、

「うつさい！」

と一声叫び、大きな足音をたてながら自分の部屋に駆けていった。ボタンと扉が閉まる。

「まあなに？ あの子ったら、びっくりするやない」

景子が廊下の方をにらむと、むんが寄ってきた。

「萌黄、ハモリさんのファンだったんですよ」

「へえそう、知らなかったわ。まあわたしはあの子と違って昼間働いてるから、テレビ観る時間もないしね。あの子もあの子やわ、大学休んでばーっかりして。暇あるんやったらバイトでもすればいいのに。自律神経がどうとか、甘えてるわ、なまけ癖よ。まったく誰に似ただか」

「萌黄のお母さん——」むんが景子の手許を指さす。

「むんちゃんはいっつも庇ってくれてるみたいやけど、え？ なに、アラララ」

興奮していたせいで、注いでいたコーヒーがカップから溢れていることに気づかなかった。

「もくもく、わたしとしたことが」

「萌黄の分、お部屋まで持って行ってあげてもいいですか？」

「そうね、お願いするわ。まったくあの子ったら自分から動こうともしないんやから……ってあなたに愚痴ってもしようがないわね」

「いえ——それじゃ」

むんは、盆にカップ2つとプチシュークリームを乗せ、ゆっくりとした足取りで萌黄の部屋に向かった。

それを見送りながら景子はため息をついた。むんちゃんはいいい子よ。器量はいいいし、すらりとしてるし。モデルさんでもやってけるんじゃないかな。ご両親と可愛い弟さんが消えてしまっても全然暗くないものねえ。爪の垢でも煎じて萌黄に飲ませてやりたいよ。もつともむんちゃんの爪には垢なんかないだろうけど――。

テレビが別のニュースを報じ始めた。

「今日は救急車が走っているのをよく見かけます。当局の発表によりますと、なぜか今日は朝から救急車の出勤回数が多く、どこも足りない状況だそうです。この現象は全国的なもので――」

あらあら物騒ねえ。日が悪いのかしら。あとで新聞の星占いのページ、見なくちゃ。

「萌黄、コーヒーできたよ」

トントんとノックすると、中からうめくような返事が返ってきた。むんは盆をひっくり返さないよう、ゆつくりと扉を開けた。

「ほら、萌黄の好きなプチシュー」

「どうせスーパの特売よ」

「おいしかったらええやん」言いつつ部屋に入り、勉強机の上に盆を置いた。萌黄はパソコンでニュース検索をしていたらしい。

「ハモさん関係？」

「うん……あ、そうや、頼まれてたん、できてるよ」

「えっ、もう？ 早いなあ」

萌黄はパソコン画面に広げていたニュース・ウィンドウを脇へやると、別のソフトを起動した。

「おかげでバイトの行き帰りが退屈せえへんわあ」

「お誉めの言葉、ありがとうございます」

萌黄はうれしそうに微笑んだ。機嫌の直りそうな気配に、むんはホッと胸をなでおろす。

「今度はねえ、リスが二匹よ」

「ええ！」むんは心の底から驚いた。「そんなことできるん？」

「ハイハイお客様、携帯をお出してください」

言われるまま、むんは自分の携帯をバッグから取り出すと萌黄に手渡した。萌黄はそれをパソコンから延びたケーブルに接続し、マウスを動かした。“逆”なので大変そうだ。画面に表示されたいくつかのメニューを選んで、ENTERをクリックすると《転送中》という表示が十秒ほどつづき、ポーンという音と共に《完了》の表示が出た。

ケーブルからはずされた携帯を受け取り、おそろおそろ開いてみる。するとホログラフィック液晶画面から浮かび上がったアニメ調のリスの立体映像が……一匹。

「あれ、もう一匹は？」

するとその声を聞きつけたかのように、二匹目が前のリスの陰から、ひよこつと顔をのぞかせた。

「うわーっ、カワイイ！」

二匹のリスは耳の形と身体の様で見分けられるようになっていた。どちらも甲乙つけがたい可愛らしさで、立体映像特有の半透明の姿を空中で震わせていた。

4

むんは大きな声で喜びを表し、萌黄を抱きしめた。

「いやあお客さん、今回は大仕事でしたよー」

「ねえねえ、この新しい子って、前からいる子のコピーやないの？」むんがはしゃいだ声をあげる。

「違いますねー、まったく別人格」

「うう、スゴい」

「話しかけてあげて」

「うん……」

むんは両手で包んだ携帯を目の高さに押し上げると、「もしもし」と声をかけてみた。

《こんにちはー》携帯から新しいリスが、玉の転がるような声で返事をした。《あなたがむんちゃんですね？》「うわわ、萌黄、この子もうわたしのこと知ってるで」

「そこだけプログラムに書いといた」

「へえ」再び携帯に顔を向ける。「ねえ、新入りさん。

あなたのお名前は何ていうの？」

《ボク？ 名前はまだないよ》

「あら、あなた男の子やね」

《そうだよ。むんちゃん、お名前付けてよ》

「わたしが？ ……それじゃね “もん” にしましょ」

《 “もん” 。いい名前だね。ありがとう》

するとそれまで脇でやりとりを見ていたもう一方のリスが前に出た。

《ようこそ、もんちゃん。ワタシは “みん” よ》

《みんちゃんは女の子だね。ボクのお姉さんかな》

《そうね、じゃあ今日からお姉さんになったげる》

《よろしく、みんちゃん》

《よろしく、もんちゃん》

二匹は液晶の中で握手を交わした。

むんは携帯を目の高さに掲げたまま、萌黄に顔を向けた。「すごいよ、この子ら、自分らで勝手に自己紹介してやる。萌黄いゝ、やつぱりあんたって天才やわ！」

むんはもう一度、萌黄を抱きしめた。すると二匹のリスもそれを見てハグし合った。

携帯電話でペットを飼うのは、五年ほど前に新しい機

能として誕生した。当初は昔流行った“たまごっち”のようなものだったが、徐々に改良を重ね、簡単な会話を人間と交わしたり、ものを覚えたりすることができるようになった。呼び名も《携帯A I》が正式名だが、今は通称P A I (Personal Artificial Intelligence) と呼ばれる。こうして“パイ”は誕生した。

近年、P A Iは好きなキャラクタを選べるようになって爆発的に広まった。特に動物を模したものが圧倒的な人気を誇り、犬、猫、小鳥などの種類別、描かれる絵のタッチ別と、豊富な選択肢がそれぞれ商品となつて流通した。絵心のある者はP A Iのキャラを自作した。ただし最近普及著しいホログラフィック液晶で使うなら、三次元C G画像として用意する必要がある。

萌黄はむんといっしょに芸術学部に進学したほどだから絵心には少なからず自信があつた。さらに萌黄はむんと違ってコンピュータに精通していた。彼女の書棚を眺めれば、並んでいる本の半分はコンピュータ関係である。家にこもりがちという性格もうまく合つたのかもしれない。彼女は三次元C Gソフトを駆使してP A Iキャラを作ることができるのだ。現にむんの一匹目のリスのP A Iキャラだって萌黄の作だ。ショップにオーダーすれば五万円はかかるだろう。

萌黄のすごいところはそれだけにとどまらない。彼女

はP A Iの知能を飛躍的に向上させることに成功した。独学だというから舌を巻く。市販されているP A Iはそこまでのレベルにまだ到達していない。彼女いわく、無から作り上げたわけじゃない、インターネット上に散在しているP A I用のサブルーチンをかき集め、いいところばかりを選び出し、ひとつにまとめたただけだという。それにしてもプログラミングのセンスがなければできない技だ。

高三の時、むんを含めて、萌黄の担任も周囲の誰もが、萌黄は情報系の学部学科に進学すべきとアドバイスした。しかし萌黄にその気は全然なく、ただむんに付いていくことしか考えていなかった。皆は彼女の才を惜しんだが、むんは萌黄の肩を持って周囲を説得する側に回った。今の時代、芸術学部だってコンピュータを使うことはある。そのうち彼氏ができれば、むんにべったりということもなくなるだろうし――。

《むんちゃん、むんちゃん》

えっ。むんは驚いて萌黄から身体を離れた。

「みんなちゃんが呼んでるよ」と萌黄。

あわてて携帯に目をやる。

《むんちゃん、急がないとバイトに遅れるよ》

「……ああ、もうこんな時間。ヤバイ！」

むんはバッグを引き寄せると、萌黄にもう一度礼を述べた。「ほんつとにありがとね。ものすごくうれしいわ」

「いえいえ、バイトがんばってね」

むんはプチシューを一つつまんでポイツと口に放り込むと、軽く身支度して部屋を出た。

「あわただしくてごめんな。また電話するわ」そしてリビングに向かって「萌黄のお母さん、お邪魔しました」。あらもう帰るの？ と母親が見送りに出てくる気配がしたので、萌黄はあわてて扉を閉めた。

外が静かになると、萌黄は机の上のコーヒーに手を伸ばした。中味はすっかり冷めていた。

5

『奈良』行きの電車に飛び乗ったむんは、今日はよく走る日やわーと思いつながら、手近な座席に腰を下ろした。

窓から差し込む陽光は、残暑の色を漂わせながらも、どこことなく秋口を匂わせている。高い空に浮かぶ小さな雲は、どれも寂しげな夕暮れの朱に染まっていた。

萌黄の家に足しげく出入りするの、家族のいない自分の家に帰りたくないからだろうか……。そうかもしれない。いや、それだけじゃないのは確かだけど。

車内に目をやる。夕方のラッシュ時にさしかかる直前

といった時間帯。部活の帰りだろうか。中学生や高校生の姿が多い。彼らは全員うつむき加減で、手に持つ携帯に向かって話しかけている。

それは遠方にいる誰かと電話で話しているのではない。P A Iと会話しているのだ。その証拠に、見ている液晶画面からときおり動物の尻尾みたいなものがひらひら飛び出てくる。

爆発的な勢いで世に普及した結果、二〇一四年の現在、P A Iは人々の生活の一部になった。

P A Iはあくまで人工知能つまりプログラミングされたソフトウェアである。大雑把に言えばコンピュータである。動物やアニメキャラをインタフェースに用いたのは、あくまで親しみを感じさせるためだったはずだ。

ちよつと賢い情報携帯端末、人間に代わって情報を検索してくれたり、スケジュール管理してくれたりするのが当初の役割だった。

ところがP A Iの知能が向上するにしたがって「人間の話し相手になってくれる」という部分がクローズアップされた。知能の度合いはよくいつて人間の幼児程度だが、P A Iの後ろにはネット接続した膨大な情報データベースがある。訊ねれば何でも答えてくれるし、ゲームの相手もしてくれる。ジョークですら理解する。

今やP A Iは、子供たちにとっては絶対に裏切らない

親友。寂しいOLにとってはやさしい言葉で癒してくれる相手。サラリーマンにとっては素直に愚痴を聞いてくれる友人。老人にとっては疎遠になった子や孫の代理のような存在。

おかげで人間同士のコミュニケーションがますますおろそかになる、と嘆く一部の大人たちをよそに、PAIのユーザーは激増をつづけ、ついに一人一台の時代に突入した感が強い。

むんは自分の携帯を取り出すと、液晶画面を開いた。ぼわんと煙が立ちのぼり、二匹のリスがふわりと空中に舞い上がった。

《むんちゃん、これからどこに行くの？》ともん。

《むんちゃんはバイトに行くんだよ》と古株みん。

《へえ、どんなバイト？》

《コンビニの店員さんさ》

ふと目を上げると、斜め向こうに座っている中学生の男の子が、驚きの目をむんのPAIに向けている。当然だろう。二匹のPAIが一台の携帯で会話するなんて、他の携帯にはまだそんな機能はない。PAIは持ち主の声にしか反応しないので、盗難の心配はまずないが、ジロジロ見られるのはいい気分ではない。

「閉じるわよ、また後でね」とむん。

《了解、むんちゃん》とおどけて敬礼するみん。

《右に同じ》とこちらは尻尾で敬礼するもん。

「うん。それからね、わたしの名前に“ちゃん”は付けなくていいよ」

《はい、むん》

《右に同じい》

同時刻。東京・新宿。

二人の男が路地裏の暗がりにも身を潜めていた。

ひとりには怪我をしているのか、奥まったあたりで身を横たえている。もう一人は油断なく表通りを見張っている。

「おい、具合はどうだ？」

見張りの男が小声で話しかけた。

「……何度も聞くな。大したことはない」

応えた男の声は、せいっぱい虚勢を張っているが、声に力がこもっていない。

「クソッ、俺たちいつたいたいどうなるんだ！ アルタに忍び込んでハモリを連れ出す、それだけだったのに」

「……まったくだ」

「『アンタの身に危険が迫っている』と話しかけても、ハモリはほとんど反応を示さなかった」

「……申し訳ない申し訳ないって、謝り続けてたな……今日の放送で大きな失敗をやらかしたらしい」

「テレビを観てなかったから判らんが、俺たちがいくら脅そうが頼もうが、立ち上がろうとさえしなかった」

「……しかし、後からやってきた連中、アイツら何者だったんだ？ 軍隊のように統率されていて、誰ひとり言葉を発しなかった」

「俺たちは、とっさに隠れるしかしようがなかった。物陰から見えていたが、ヤツら、束になってハモリを取り囲んでたぞ」

「……さつき表通りで誰かが、ハモリが自殺したって叫んでたな。そんなはずはない。彼は――」

「――殺された」

「……自殺に見せかけてな」

「有名タレントの命を奪って、どんな利益がある？」

「……知らん」

「しかも逃げようとした俺たちを躊躇せず撃ってきた連中の正体は？」

「……テロリスト集団ってな雰囲気だったな」

見張りの男は深いため息をついた。

「俺たちはこれからどうすればいいんだろう」

「……連絡を待つしかない」

「そうだな」

見張りの男の携帯が鳴った。すかさずポケットから携帯を出し、受話口に耳を押し当てる。

「——そうか」
通話は短かった。

「……何て言ってた？」

怪我をしている男の質問に見張り男は応えず、すつくと立ち上がると、そのまま表通り目指して歩き始めた。

「……お、おい」

見張り男と入れ替わりに、別の男が路地の入口に現れた。ふたりは互いに言葉を交わすことなくすれ違い、見張り男はそのまま表通りに出て、姿を消した。

「……オマエは？」

第三の男の手には銃が握られていた。怪我をした男は息を飲んだが、次のひと言を発する前に、額の中央を撃ち抜かれていた。

6

窓の外は真っ暗になった。それでも萌黄は部屋の明かりを点けなかった。

つい五分钟前、ドアがノックされた。母が「ご飯食べないの？」とドア越しに訊ねてきたが「いらない」とだけ答えた。今のわたしはこの世界（と言っていい？）では左利きになってしまふのだ。箸を左手に持って食事なんかしたら、あの母のこと、騒々しく質問を浴びせてくる

だろう。かといって左手で箸など握れないし。

暗い中、パソコンの画面だけが光っている。

幸いだったのは、パソコンの機種がマックだったことだ。マウスのボタンはウインドウズマシンとは違って一つしかない。だから左右を意識することもない。

マウスパッドの位置はすでにキーボードの右側に置き換えてある。萌黄はマウスに手を伸ばし、画面の中のブラウザのアイコンをクリックした。ブラウザが起動し、インターネットに接続した。

表示される文字は、すべて左右が反転している。あらためて深いため息が漏れる。

この状態は、いつまでつづくんだろう……。

一種の病気なんだろうか。何日かすれば元通りになるんだろうか。いや、わたしの身体だけは正しく見えてるんだから、眼や頭の病気なんてわけではない。じゃあ原因はナニ？

いくら考えても、堂々巡りするばかりだ。解決の糸口が見あたらない。

唯一の手がかりはハモリさんだ。どうしてハモリさんはテレビであんなことを言ったりしたんだろう。本当にハモリさんもわたしと同じだったんだろうか。

あのハモリさんですら取り乱したのだ。自分みたいな人間が耐えられなくても当然じゃないか。

……ピーポーピーポー。

また救急車のサイレンが聞こえてきた。あの音には心底気が滅入る。今日は何台が家の前を通り過ぎただろう。もしや——運ばれてるのは、わたしやハモリさんみたいになった人？

萌黄は身体を椅子の背もたれから離すと、画面のニュースに目を走らせた。救急車の大量発生（違うか）なんて見出し、どこかに出てないだろうか。

目当てのニュースはすぐに見つかった。「本日の救急車の出勤回数は記録的」とのこと。しかし萌黄の予想は裏切られ、どこにも左右が反転したなどという言葉は出ていなかった。

落胆しつつ、記事に添えられたリンクをたどっていくと『救急車同乗体験記』という掲示板に行き着いた。書き込みを目で追っていると、奇妙な記述を見つけた。

“搬送中の患者の脚が、みるみる崩れだした”。

……どういうこっちゃ？ 足が崩れるやなんて。

さすがに逆文字のまま読むのに疲れたので、机の脇に立てかけてあるミラースタンドを持ち上げ、画面を映しこんで読んでみた。

投稿した大阪在住の男性は、今日の午前中、看護師として救急車に乗り込み、交通事故で左脚に大怪我を負った患者を病院まで運んだそうだ。その際、目の前で患者

の左脚が、まるで固めた砂が風に飛び散るように、どん
どん崩れていったという。

彼は最後に “ひょっとして新たな伝染病か？” と締め
くくっていた。

萌黄はミラースタンドをベッドの上に放り出し、身体
をパソコンから離れた。足がぼろぼろ砂みたいになるな
んて想像するだに恐ろしいが、どうやら救急車の異常発
生（違うって）と左右反転現象の間には、何の関係もな
いみたいだ。チェッ。

萌黄はパソコンの電源をOFFにした。

部屋は真っ暗闇の中に沈んだ。何も見えない。

それでいいんだ。見たいものなんかない。こうやって
暗くしていれば、もと通り “左は左、右は右” の世界に
いるような気になれる。

もしわたしの異常が母に知れたら、心配性むき出しの
母のこと、半狂乱になって救急車を呼ぶかもしれない。
そうしたらわたしの身体も砂みたいに、さらさらと消え
てしまうのだろうか……。

こわい、こわいよ、むん。

突然、暗闇の中に独りでいるのが怖くなり、萌黄は部
屋の明かりをつけようと椅子から立ち上がった。しかし
身体の覚えている部屋の感覚は、昨日までの間取りでし
か通用しない。萌黄は右足の小指をイヤというほど机の

足にぶつけてしまった。不快な痛みが全身を貫く。

「アタタ……」

血が出たかな。そう思いながら小指の先をさすっていると、机の下で小さく点灯している明かりに気づいた。携帯だ。充電器に載せたまま、すっかり忘れていた。

携帯の中には、もちろん萌黄のP A Iがいる。

彼女は手を伸ばして携帯をつかみあげると、二つ折りの蓋を開いた。液晶画面はすぐに明るくなった。

そこには丸くてゴツゴツした岩のようなものが横たわっていた。

7

携帯画面の放つ鈍い光が、部屋の一角をぼんやりと浮き上がらせる。壁に貼ったポスターの文字が逆に読めるのも見える。萌黄は自分が裏返った世界にいるという現実感にあらためて引きずり戻された。

彼女はよけいなものが目に入らないよう、必要以上に顔を画面に寄せ、話しかけた。

「モジ……モジ……」

“モジ”とは彼女のP A Iの名前。

呼びかけが聞こえたのか、画面の中央で、いびつな岩石のように鎮座していた物体がわずかに動いた。

突起状のものが岩石の表面からよきつと現れた。それはどうやら手のようで、肉球らしきものが見える。岩石はポリポリと音を立てて自らの表面を搔くと、萌黄に對して一声返した。

《なんや？》

吐き捨てるような無愛想な返事。萌黄は気にせず微笑みながら、

「モジ、起きて。話したいことがあるんやけど」

《もう、めんどくさいのお》

モジと呼ばれた物体は身を起こした。そして萌黄に顔を向けた。

《なんやねん、もえぎ》

怪獣ゴジラ。しかも二頭身。それがモジの正体だ。それはまさに、かつてスクリーンの中で暴れ回った怪獣のスーパーデフォルメ。S D 版で、背中を縦に走る背びれが雄々しく揺れている。相手を威嚇する大きな二つの目はギロリと光り、突き出た両顎の間には鋭い牙が並んでいる。

萌黄のゴジラ。モ・ジラ——“モジ”である。

もちろん萌黄が作った3DCGの映像だ。アニメチックな輪郭線も加味されていて、強面こわもてのキャラなのにどことなくコミカルさが漂っている。

《せっかくよお寝とったのに》

モジは短い両手で瞼をゴシゴシとこすった。その仕草

が存外に可愛らしいことにモジ当人は気づいていない。
萌黄は思わずくすつと鼻で笑った。

《あ、笑^{わろ}たな、ナニがおかしいねん！》

スゴんで見せても全然怖くない。モジは勢い余って画面から飛び出してきた。ふつうP A Iが自ら立体画像となつて画面から出てくることはない。モジは萌黄が長年培^{つちか}った知識を総動員してフル・チューンアップされた強力なP A Iだ。だからモジの知能レベルは、市販のP A Iとは比較にならないほど高いし、当然会話能力もそこらへんのP A Iが束になつたつて敵わない。

「笑^{わろ}てへんよ。それよりモジ、むんにメール書きたいから手伝^{てつど}うて」

《そんなことで、ひとを煩わすなや》

観念した顔で座り直したモジは、あくびを噛み殺しながら、ドーゾと短い手を出す。いかにもエラそうだ。

「んーとね、むん、今日はいろいろ迷惑かけてしまつてごめんなさい。昼寝が効いたせいか、気分はだいぶよくなりました。まだ右と左は逆転したまんまだけどね……。明日起きたら元通りになつてたりするかもしれない。ちよつとだけ期待してます。もしよかつたら朝、立ち寄ってください。甘えてばかりでごめん……。」

《——そんだけ？》

モジはぞんざいな口調で訊ねてくる。

「うーん、もうちょい待って。今のじゃわたしが一方的に言いたいこと言うてるだけの気がする。むんへの感謝の気持ちじゃ足らへんかも。そう思わへん？」

《さあねえ、別にエエんちゃう？》

「アンタ、テキトーに返事してるなあ」

《そんなことより、右と左が逆転したまんまって、どういうことなん？》

モジは好奇心旺盛だ。萌黄は彼に顔を寄せる。

「わたしの顔見て、どっかおかしいと思わん？ 言うとかけど、不細工とかそういうのと違うよ」

《先に言われてもおたがな》

萌黄はさらに顔を近づける。モジも鼻面をこすりつけるほど接近してくる。ほとんどにらめっこだ。

《……肌荒れ気味》

「アホッ！」

萌黄は携帯をぽーんと机に放り投げた。

《コラなにすんねん！》

「ふん、痛くもないくせに」

《びっくりするやないか……言うてほしいんは、ホクロの位置が左右入れ替わってるってことか？》

萌黄はあわてて机に這い寄ると、顎を天板に乗せて、

「アンタにも判った？」

《判らんでどないする。毎日顔突き合わせとんのに》

「はあー。モジにまでバレたんじゃ、母さんと顔あわせ
るわけにはいかなあー」萌黄は肩を落とした。

8

PAIは高度な人間識別能力を持っている。単なる指紋センサーだけでなく、内蔵カメラに写った顔の造作の配置、声によって判別することができなのだ。

萌黄は今さらながら胸をなで下ろしていた。モジに別人だと拒否される可能性だってあったのだ。

《なあなあ、なんでホクロ付け替えたん？》

モジはますます身を乗り出してきた。もっとも携帯から一定の距離以上は出られないのだが。

「そんな無意味なこと、するわけないやろ」

《してるやんけ》

「し・て・な・い！ ……明日になったら元あったところに戻ってるわ、きつと」

《ワケ判らんの》

「今ごっつーブルー入ってんねん。勘弁して」

萌黄はベッドによじ登ると、ごろんと横になった。

薬、飲まなきゃ。トイレにも行きたい。

そうは思うが身体がだんだん重くなってきた。頭の中にも灰色の霧が重苦しくのしかかってくる。昼間寝たの

にもう眠い。長年ひどい不眠症に悩んでるのに昨夜から不思議とよく眠れる。左右反転の世界は想像以上に萌黄を疲れさせたのかもしれない。

《もえぎー、もう寝るんかー》

「まだまだ」

《ほなら、ボケ&ツツコミごっこ、やろー》

退屈しのぎに二人でよくやるお遊びだ。

「モジがボケやー」

《ほないくで。……携帯いうたら、床屋に行ったときバリカンなんかで髪の毛がはさまったりして》

「毛エ痛い、ケータイかあ？ 単語と違うやん」

《カタいこと抜きや。毛エ痛いっちゅーたら昔懐かしウルトラセブンの中で地球を守ってたのがウルトラ》

「けーびたい。警備隊かいな」

《その調子。警備隊っちゅーたら、髪の毛の生え際が富士山みたいになつてて》

「……ふじびたい、富士額かいな。ちよつとツライで《気にせんと。ほな次。ふじびたいっちゅーたら……》

「うなぎパイ！」

叫んだとたん、萌黄の開いた眼に、カーテンを開けたままの窓から朝の光が飛び込んできた。

机に置かれた携帯の画面では、背中を丸めたモジが、

すやすや眠っている。ボケとツツコミを繰り返しながら、萌黄たちはいつの間にか眠りに落ちていたらしい。

それにしても、なにゆえ、うなぎパイなのか？

浜名湖へ遊びに行った夢を見ていたわけでもないから、おそらく遊びのつづきで出た言葉なんだろう。どういう流れでうなぎパイにたどり着いたのか気になる。

——何、のんきなことを！

萌黄は、部屋の中が昨日と変わらず左右反対なことに愕然とし、ひどく落胆した。

「なんでよもう。二日目突入なんて——」

うんざりやわ。ひどすぎる！

枕許の目覚まし時計は、起床まであと三十分あることを示していた。今日大学へ行くならば、だが。

「そうだ。モジ！ むんへのメール出してくれた？」

画面の中の尻尾がプラプラ動くと、眠気混じりの声が返ってきた。

《出してへんよ。出せえて言われへんかったから》

「もう気が利かんねえ、今すぐ出して！」

《朝から人使い荒いのお——出したで》

母はすでに仕事に出かけていた。萌黄は顔を洗って、スープとトーストだけの朝食をお腹に入れた。もちろんほろ苦いコーヒーは欠かせない。ウィルも毛繕いに余念

がない。いつもの朝の光景——違和感いっぱい。

昨日のような頭痛がしないのはせめてもの救いだ。テレビをつけると、救急車の出勤回数が昨日一日で普段の五十倍以上にのぼったことが報じられていた。司会者と評論家があれこれ言ってるが、結局のところ原因は判っていないらしい。

ネットの掲示板で見た「身体が崩れる」ような話が出てこない。なんでだろう。あれはたまたまそういう難病か奇病の患者さんだったんだろうか。

妙に気になる。萌黄は服を着替えながらパソコンを立ち上げ、問題の掲示板ページにアクセスしてみた。

——ない？

“該当するページは存在しません”という文字が画面に現れた。

結構、年季の入ったマジメなページだったのに、たった一日で消えるなんて。

まさか、どこから圧力がかかったとか。

報道規制、言論封殺……。そんな言葉が頭に浮かんだが、もとより根拠はない。

ピンポーン。

チャイムの音に我に返った。むんだ。時計に目をやると——げっ、乗る電車の発車時間まであと五分！

「ごめーん、寝坊してもたわ」

謝る萌黄にむんは中へ入りもせず、「早よ早よ」と萌黄を急ぎ立てた。

萌黄はパソコンを消すと、大慌てでバッグを抱えた。玄関を出た二人は、エレベータを待つのももどかしく、階段を駆け下りていった。

「また今日も走ってばかりかなあ」

萌黄の部屋では、忘れられた携帯の中で、モジが安らかな寝息を立てていた。

携帯を置いていったことが、運命を分けることになるうとは、萌黄にとっては知る由もなかった。

9

萌黄とむんの乗った電車が、大阪へと向かっていたその頃――。

「発見しました！」

絶叫に近い声が、部屋にいた者たちの耳を叩き、つづいて大きなどよめきを呼び起こした。

誰もが自分の席を離れ、声の主のそばに駆け寄った。

部屋の隅で、計画書に目を通していた髭の男も立ち上がり、小走りに近づいてきた。

声を上げた若者は、

「みんなどけどけ。隊長をお通ししろ！」
と周囲の人間たちを手で追い払う。隊長と呼ばれた髭の男は、若者の前にあるディスプレイ画面に顔を寄せると、これですと指さされた箇所をじいっと見つめた。

『まだ右と左は逆転したまんまだけどね』

「――なるほど。可能性はありそうだな」
つとめて冷静さを装いながら、次の行に目を移した。

『明日起きたら元通りになってたりするかもしれません。
ちよつとだけ期待してます。』

「……リアルだ」

隊長の断定する口振りに、若者たちは「やった！」と
口々に連呼し、拳を突き上げた。

隊長は、歓声が鎮まるのを待って、発見者である若者
に位置を確認させた。

「GPSスキャンによりますと、これは奈良市内ですね。
メールが発信されたのは、今から二十分前です」

若者が操作すると、部屋の一角に掲げられた大型スク
リーンに関西の地図が投影された。中心あたりで赤い光
が点滅している。

「名前は？」

「お待ちください」

若者が操作すると、画面にメールのヘッダが拡大表示された。

『差出人…ミツシマ モエギ』

「女性か……」

隊長は鋭い一瞥でその名前を脳裏に刻むと、彼の指令を固唾を飲んで待っている隊員たちに顔を向けた。

「今度こそ確実に“リアル”を確保せねばならない。第一班、出動だ！」

おお！ と関とぎの声が上がる。

「関西支部にも連絡を入れておけ。第二班以下は、次の“リアル”探査を続行すること。以上！」

了解、と若い返事が凜として響き渡った。

萌黄は大学の正門を前にして、帰りたくなっていた。

どうにかここまでたどり着くことは——まさにたどり着くという表現がピッタリ——できた。

途中の乗換駅で、バイト先に向かうむんと名残を惜しんだ後、ひとりで支線の各駅停車に乗り、ひとりで駅を降りて大学通りを抜け、ここまで歩いてきた。

他人が見れば、単なる通学だが、萌黄にとっては大仕事だった。ましてや四ヶ月ぶりの登校ともなればなおさらだ。

すでに萌黄は、エネルギーの半分以上を消費した気分になっている。帰りの分はどうしよう。

赤レンガを積み上げた意匠の正門。その前に突っ立つ萌黄の脇を、学生たちが次々と門の中へ吸い込まれていく。

萌黄は一步前に踏み出した。ここまで来て帰ったら苦労が水の泡だ。むんの心遣いを無にすることにもなる。

むんはわざわざ大学の教務課に問い合わせてくれたらしい。昨日の後期初日のオリエンテーションに出られなかった者だが、なんとか配慮してもらえないかと。教務課側は構わないとていねいな返事をくれたそうだ。萌黄が自分で電話していたら間違いなく小言をくらったろうが、北海道事件の遺族であるむんは、大学の広告塔の一翼を担っている。だからなんでもハイハイ聞いてくれるのよ、とこれはむんの言である。

「夕べ、電話したんよ。そしたらモジ君が代わりに出て、萌黄はただいま就寝中ですって」

「そうやったん。ごめん。なんか異様に眠くって」

「で、どう？ 事態は改善された？」

「とんでもない。昨日とゼンゼン変わらへんわあ」

「そっか……。萌黄のたいへんさを理解してあげられたらええんやけど。とにかく今日は多少無理でも学校行った方がええと思うよ。そやないと後々どんな扱いを受けるか判らへんし、ヘタしたら留年——」

むんのありがたい助言を胸に、萌黄は左右の裏返ったキャンパスを横断し、文芸学部の校舎に足を踏み入れた。廊下を歩いていると、あちこちで見覚えのある学生と遭遇したが、顔を背けてどうにかかわした。あなたの顔ヘンね、なんて言われたくない。もつとも、わたしの顔を記憶している人なんているのかな？ 自意識過剰だったりして。

教務課での手続きはわずか五分で終わり。萌黄は拍子抜けする思いがした。

目的を達成したら、急に周囲を冷静に観察できるようになり、萌黄はこみ上げてくる心細さに押し潰されそうになって、あわてて教務課を離れた。

無類の人見知りで引きこもりがちなわたし。独りで

登校するのさえ億劫なのに、世界は根底から裏返ってしまった。世界に裏切られたとも思える。

こんな状況でこれから毎日授業を受けろっていうの？
キャンパスライフを楽しめっていうの？

自動ドアをくぐり抜け、何かに誘われるように、萌黄は中庭に出ていった。そこはちよつとした公園のようになっ
ていて、中央に噴水があり、周囲には植物が適度に配置されている、いわば憩いの場所だ。

萌黄はベンチの一つにドスンと腰を落とした。

今日の空は薄い雲がひろがっている。太陽の光もさほど強くない。

そうだ、むんにメールしよう。ちゃんと手続き済ませたよーって。

萌黄は小脇に抱えたままのバッグに手を入れた。

あれ？ どこ？

バッグを膝の上に乗せ、今度は真剣に中をまさぐった。背中を冷や汗が流れる。

げえっ、忘れたんや……。

とことんツイてないなー。

突然、孤独感がつのってきた。自分の周囲だけが太陽の光を遮られてグングン温度が下がっていくような、そんな得体の知れない感覚がひろがっていく。

自作のソフトウェアとはいえ、いつの間にかモジは、

ペット以上の存在になっていた。最近では予想もしない反応が返ってくることもあるが、どんな時でも相談相手になってくれるのは心強い。「PAIとばかり遊んで、人間の友達を作らない」と非難する大人たちもいるが、しょうがないじゃないか、友達にしたいくなる人間なんて、むん以外にいないんだから……。

「こんにちは」

そばで男の声がした。声は萌黄の頭にわだかまっていた思念を吹き飛ばすのに十分な威力を持っていた。

まるで歌のように軽やかな声。萌黄はその声に聞き覚えがあった。

「光嶋^{みつしま}萌黄さん、だよね」

男は萌黄のフルネームを口にした。ベンチに座ったまま、おそるおそる首を巡らせる。そこには一人の男が立っており、萌黄に向かって涼やかな笑顔を向けていた。わたしはこの人を知っている。でもどうしてここにいるの？

「揣摩^{しま}太郎——さん」

ぽつかり開いた萌黄の口が、相手の名前を呼んだ。「やっぱり判っちゃったかあ。横に掛けてもいい？」

男は萌黄の返事も待たずに、しなやかな動きで隣りに腰をおろすと、優雅ともいえる仕草でその長い足を組んだ。

揣摩太郎。ナマの彼を見るのはこれが初めてだ。けど萌黄は毎日彼に会っている。自宅に貼ったポスターで。ジャニーズの人気五人組グループ《ダ・ヴィンチ》のリーダー。昨年はソロのシンガーソングライターとして全国ツアーを行った。また、初のアニメ原作として話題になったNHK大河ドラマ『陽だまりの樹^き』では主人公の武士・伊武谷万二郎を好演した。

デビューしてまだ四年にも満たないが、輝かしい芸歴には枚挙にいとまがない。

今や人気絶頂の彼。萌黄にとってはあこがれの人。

その彼がなぜかいま隣にいる。予測不可能な事態に、萌黄はひたすら当惑し混乱し……頬を真っ赤に染めた。

《第三章につづく》